

平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

自分自身の心身のコンディションを把握する力、目標の実現に向けて人生を切り拓く力、病気と向き合う気力、自分自身を大切に思うとともに、自分のまわりの人々を大切に思う心
これらを育むために

- 1 子ども一人ひとりの「学ぶ意欲」を引き出し、「学ぶ喜び」を実感できる学校をめざします
- 2 病気療養中の子どもが安心して学べる、安全に学べる、「安心で安全」な信頼される学校をめざします
- 3 社会やさまざまな人とのつながりを通して、子ども自身が目標を持ち、今後の自分を考えて行動する、夢を持つための学校をめざします
- 4 地域に学ぶ病気療養中の子どもたちへの教育への理解促進を図り、教育的支援を行う学校として、全ての教員が「病弱教育のスペシャリスト」をめざします

2 中期的目標

- 1 児童生徒一人ひとりの状況に応じた学力の向上
 - (1) 児童生徒一人ひとりの状況を理解した上で、入院治療による「学習空白」等を補完するだけでなく入院中の学習機会を積極的にとらえ、子ども一人ひとりのニーズに応じた学習形態による学力向上をめざす。ICT機器の活用など教材教具の工夫、内容精選を図り、「わかる喜び」「できる楽しさ」を実感できる授業を実現する。
- 2 「安心で安全」な学校づくり
 - (1) 学校施設設備の日常の点検見直しはもちろんのこと、災害時における「行動マニュアル」「備蓄品」等の整備を行い、安心で安全な学校環境をつくる。
 - (2) 子どもたちや保護者の思いに寄り添う、安心で安全な学校環境をつくり上げるため、医療、福祉、心理、人権等に関する基礎的知識とスキルを向上させる。
 - (3) 前籍校や関係機関との連携のもと、円滑な前籍校への復帰をめざすとともに、必要に応じて復帰後の支援も継続的に行っていく。
- 3 子どもたちが、自己と他者との関係づくりをすすめ、自分の夢を持てる学校づくり
 - (1) 様々な教育活動を通じて、病気の理解と自己の理解をすすめ、本人の「自己肯定感」を育てる。
 - (2) 学校行事や様々な教育活動を通じて、社会や他の人々との繋がりを実感し、考える機会をつくり、ソーシャルスキルの向上を図る。
 - (3) キャリア教育の充実を図り、子ども一人ひとりの発達段階に応じた目標を考えさせる。
 - (4) 自己実現に向けての「進路」を考え、実現に向けての方策を具体的に考え実行する力を養う。
- 4 病弱教育の専門性の向上とセンター的機能の発揮
 - (1) 子どもの病態・発達段階・学習能力・障がいの重複等個々の子どもの状況を正しく把握し、本人・保護者のニーズ、在籍期間を考慮した上での「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」の作成及びその活用を図る。
 - (2) 医療・福祉・心理等に関する基礎的知識・スキルの向上を図るため、校内での研修の充実を図るとともに、校外での研修に積極的に参加し、伝達研修等を通じて学校全体での共有化を進める。
 - (3) 特別支援教育免許状の取得率の向上を図る。
 - (4) 病弱教育の理解促進を図るため、医療機関とも連携し、最新の医療情報も含めた病弱教育に関する情報発信を強化する。
 - (5) 地域の病弱教育における支援ニーズの把握に努め、全教員が「病弱教育のスペシャリスト」として地域の学校への支援の充実を図る。
- 5 組織力の向上
 - (1) 各部署で異なる医療・教育環境に対応し、適切な教育活動を展開するとともに、学校として本校と分教室間において、教材、実践事例や経験等の共有を促進し、連携・協力を強めることでチームとしての教育力の向上を図る。
 - (2) 医療・福祉・前籍校・地域の学校等とのより良い連携を深め、学校の教育力の向上を図る。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成26年9月～10月実施分]	学校協議会からの意見
<p>○児童生徒、保護者、病院関係者、教職員を対象に実施 回答数に関しては、在籍者の変動により毎年変化する。今年度は、病院関係者の回答数が大幅に増加した。各アンケート項目の「よくあてはまる」「ややあてはまる」の回答を肯定的な回答、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の回答を否定的な回答として、結果の記述、分析を行っている。</p> <p>【児童生徒】 回答数47人(昨年57人) ・「学校に行くのは楽しい」「いっしょに遊ぶ友だちいる」「先生は、私が頑張ったことを認めてくれる」「授業は、わかりやすく楽しい」の4項目は、「よくあてはまる」だけで60%を超えている。友だちとの関係が良く、学校を楽しみにしている児童生徒が多い。また、児童生徒から先生や学校への信頼度の高さが伺える。</p> <p>・課題としては、昨年度に引き続き「将来の生き方について考える機会がある」の肯定的な回答が50%にとどまり、他の項目と比較しても「全くあてはまらない」の比率が高いことから、病気と向き合いながらも夢や希望を育てるキャリア教育のさらなる充実があげられる。</p> <p>【保護者】 回答数43人(昨年61人) ・肯定的な回答ポイント80%以上は、「授業内容は、子どもに合うよう工夫されている」「学校は前籍校や病院と積極的に連携して指導にあたっている」「学校は家庭への連絡や意思疎通を行っている」などの7項目であった。</p> <p>・課題としては、18項目中16項目で、「よくあてはまる」のポイントが減少し、減少分は「ややあてはまる」に移っている。すなわち、各項目、保護者の高い満足度が減少している。肯定的な回答ポイントでは、昨年と大きな変化がないといえるが、次年度は、児童生徒のQOLを高めることで、保護者の高い満足度につなげること</p>	<p>第1回(6/23) ○病院から退院し、本校から前籍校に戻るときの困難の実体はどのようなことか。 ・治療のため、頭髪が無くなるなど入院前と容姿が異なり、思春期の子供にとって友人等に見られることへの抵抗感が強い。長期の入院になることも多く、病気が治っても体力面でかなりダメージがある。退院後は、感染症にかかりやすいことや、薬の副作用が続くこともある。子どもの心身の状況について前籍校の先生方の理解や配慮が必要。また、長く入院して前籍校に戻ると友人関係が以前と同じように築けるかが心配であったり、自分の病気のことを友達にどのように伝え、受入れてもらえるかという不安もある。さらに、前籍校に戻ったときの成績面の不安もある。</p> <p>・入院によって生活のリズムは改善されるが、登校することへの不安は大きく、退院してもすぐには健康な子どもたちのように登校することは難しい。これらの状況を前籍校の先生方にも知ってもらい、入院している間から少しずつ前籍校へ通う練習も必要。</p> <p>○様々な地域で病弱支援をするため、電車バスを使う出張の機会が多いがその経費は、一般校と比べて違うのか。 ・出張に関しては他の学校と一律同じに扱われると非常に苦しい。訪問教育の場合には必ず病院に行つての教育、出張ができないと授業ができない。</p> <p>・先生一人当たりの年間出張旅費の配当は他校と同じ。本校は大阪北部の病弱教育を担っているが、筋疾患児童生徒の支援となると大阪南部の学校への出張もあるので、出張旅費はかなりかかる。</p> <p>第2回(11/17) ○病弱教育を受けることのできる所(支援学校、院内学級等)の情報窓口はどこになるのか。具体的には行政なのか、あるいは支援学校のHPを見ればよいのか。</p>

府立刀根山支援学校

<p>が目標となる。</p> <p>【病院関係】 回答数 189 人 (昨年 112 人)</p> <ul style="list-style-type: none"> 肯定的な回答ポイント 80%以上は、「児童生徒は、学校で学習することが楽しい様子である」「学校は児童生徒の身体や心の状況をよく理解し、適切な指導を行っている」などの 4 項目であり、今回も前回も 4/10 であった。 課題としては、肯定的な回答ポイントが前回に引き続き 60%台にとどまった「医療と学校の定期連絡会は十分機能している」があげられ、引き続き、医療と教育の連携に重点をおき、さらに医療関係者との意思疎通や情報共有等の充実を図る必要がある。 <p>【教職員】 回答数 47 人 (昨年 49 人)</p> <ul style="list-style-type: none"> 肯定的な回答ポイント 80%以上は、前回 14/33 であったが、今回は 21/33 と大幅に増加し、肯定的に変化した項目は、33 項目中 26 項目あった。特に、「学校運営に、校長のリーダーシップが発揮されている」「学校運営に、教職員の意見が反映されている」といった項目について、肯定的な回答の変化 (20%以上増加) が大きかった。 課題としては、肯定的な回答ポイントは上昇 (否定率は低下) したものの、否定的な回答ポイントが 30~40%台となっている「学校全体での情報共有が進められている」「学校経営計画を踏まえ、6 部署の一体化、学校組織の一体化が進められている」といった項目があり、今後さらに、2 教育部 4 分教室の情報共有を含めた一体化の動きを一層すすめる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 筋ジスの場合、小学校は地域の学校へというケースが多いが、中学校、高校に上がる段階での進路決定は、巡回相談による部分が多い。全ての支援学校の情報については市町村教委から提供できる。 病弱の支援学校は希望すれば入れるのではなく、基本的に入院が前提。したがって、HP で広報して入学希望者を広く募集するものではない。 <p>第 3 回 (2/9)</p> <p>○学校教育自己診断の報告</p> <ul style="list-style-type: none"> アンケートの回収方法及び集計方法に意見交換。 キャリア教育では将来の自分の姿を考えることが必要。しかし病気の事もあり難しいことがあるが、生徒たちもその部分をしっかりと考えていきたい人が結構いる。 学校と病院の連携について、肯定的な評価が若干減っている。おそらく急性期の病院では主治医も変わるのでより連携が必要。学校の方から発信しないと医師にはなかなか伝わらない。 <p>○学校経営計画の取り組み及び自己評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校と病院の連携では、今年度はかなりコミュニケーションが円滑にとれた。それぞれの部署で状況は異なるが、本校については連携が密にとれた一年。 学校と医療の連携について、子どもが学校の中でしか見せない部分について医療の方に伝わるという事は必要。何よりも学校の方が医療と連携していきたいというメッセージを伝えていく事が大事。 卒業後の進路の選択肢が増えるように、先生と一緒に保護者も情報を集めることができればと思った。 専門性の向上では高い評価。先生が病弱教育の専門性をつけられてきた。一方、医療関係の看護師さんたちとは、挨拶に加えて体調や学校での様子等の子どもの情報を簡単に伝えようということが連携あるいはコミュニケーションにつながる。 将来の生き方については、担当している生徒の事を考えて、教えるのではなくこういうことを言いたいという発信が大切。そのためには先生方もしっかりと勉強することが必要。
---	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 一人ひとりの状況に応じた学力の向上	<p>(1) 入院治療中の学習機会を積極的にとらえ、子ども一人ひとりのニーズに応じた学習形態による学力向上</p> <p>(2) ICT 機器の活用など教材教具の工夫、内容精選を図る</p>	<p>(1) 教員が正確に子どもを理解したうえで、一人ひとりの状況に応じた学習課題設定ができるよう、課題設定力の強化を図る。</p> <p>ア アセスメントに関する理解を深める教員研修を実施する。</p> <p>イ 各部署で、退院時にアンケート調査を実施することにより、学習に関する効果の把握を行う。</p> <p>ウ 公開授業研究を計画的に実施する。</p> <p>(2)</p> <p>ア 指導教諭と小学部教員を中心として、算数・国語における学習指導の流れを系統表にまとめ、「刀根山スタンダード」の検討を行う。</p> <p>イ TV 会議システムやタブレット端末を活用した実践事例の交流を行うことで、更なる工夫につなげる。</p> <p>ウ ICT 機器を活用した授業の環境整備及び実践事例等の共有化を図る。</p>	<p>(1) (2) 学校教育自己診断の授業に関する児童生徒向け、保護者向け質問の肯定率 93%以上 (H25 年度保護者 95%、児童生徒 88%)</p>	<p>授業に関して、授業への肯定は、保護者は昨年度と同じ 95%だが「よくあてはまる」が 82%から 73%に減っている。児童生徒は昨年度 88%から 85%に減ったが「よくあてはまる」は 44%から 63%に増加。もともと母数が少なく、変化が大きいが授業力を向上することは継続して課題。(○)</p> <p>(1)</p> <p>ア 今年度は精神医療センター分教室で実施。</p> <p>イ 授業アンケートは行ったが、児童生徒の急な退院等もあり、全員には実施できなかったが、各自が授業を振り返る材料となった。</p> <p>ウ 今年度は新任教員が 3 名おり、公開研究授業を行った。うち、1 名は支援学校の初任者研修の際に実施した。他は授業参観時に公開したが、病院内では普段からいつでも公開している。分教室では 1 つの教室内で複数の教員が授業を行っており、自身が授業を行うとともに同室にいる教員の授業を見ている。多数の学校関係者に公開するのは感染症対策の観点から難しい。</p> <p>(2)</p> <p>ア 指導教諭がまとめた。さらに検討を重ね、教科書の異なる児童生徒を教える際の活用につなげる。</p> <p>イ 府教委のシステムを利用して、自前の TV 会議を行えた。実践事例研修会で活用状況を発表し、共有化を図った。</p> <p>ウ イと同様にパソコン研修会や実践事例研修会で発表し、共有化した。環境整備については、古い OS のパソコンの買い替え等の対応が急務であるが学校だけでは予算面等で困難な点がある。</p>
2 安全で安心の学校づくり	<p>(1) 災害時における安全・安心の確保</p> <p>(2) 子どもの思いに寄り添う安心・安全な環境づくり</p> <p>(3) 円滑な前籍校への復帰と継続的支援</p>	<p>(1) 全部署における「備蓄品」の配備と整備表の作成。学校全体での安否確認や帰宅困難時等における「行動マニュアル」の改善に向けての検討を行う。</p> <p>(2) 教員のカウンセリングマインド育成のための校内研修を実施し、教員のスキルアップを行う。</p> <p>(3)</p> <p>ア 転入・転出時や退院時に、機に応じて関係機関と開くケース会議の更なる充実を図る。</p> <p>イ 「交流及び共同学習」については、医療機関、前籍校、福祉機関等と丁寧な連携を行い、計画的・組織的に実施する。</p> <p>ウ 退院後の状況把握、教育支援を計画的、継続的に行う。</p>	<p>(1) 整備表の完成及び「行動マニュアル」への反映の素案作成 学校教育自己診断の防災、安全に関する質問の児童生徒・保護者の肯定率 70%以上 (H25 保護者 66%、児童生徒 68%)</p> <p>(2) 研修を 2 回以上実施 学校教育自己診断の教育相談に関する保護者・児童生徒向け質問の肯定率 80%以上 (H25 保護者 83%、児童生徒 75%)</p> <p>(3) 学校教育自己診断の連携に関する保護者・医療機関向け質問の肯定率 85%以上 (H25 年度保護者 95%、医療機関 73%)</p>	<p>(1) 1 学期に備蓄一覧を配付する等、一定整理できている。備蓄物品の再配分と保存期限の確認を実施した。一方、これらは学校単独で対応しているが今後病院との連携も検討する。安全衛生面では学校が病院内または隣接しているので保護者の肯定率は 74%あるが回答数が少ない。非常変災時の対応では児童生徒は 79%であるが、分教室では警報が出ても授業を行うので保護者の無回答が 38%と多い。(○)</p> <p>(2) 全体研修では入院していても使うことのある携帯電話等について「子どもたちの携帯電話に潜む危険」と題して教職員に対して研修を行った。他はそれぞれの分教室ごとに実施。教育相談では保護者の肯定率は 86%となった。児童生徒も 80%はあるものの、肯定以外の回答もあり、その要素を分析し、肯定以外が減る対応をすすめる。(○)</p> <p>(3)ア、イ、ウともに個々の児童生徒に対して実施した。連携の肯定率が保護者は 98%あるのに対して、医療機関では 67%にとどまっており、もっと連携して信頼関係を築く必要がある。(△)</p>
3 自分の生き方を考える力の育成	<p>(1) 病気の理解と自己理解をすすめる、「自己肯定感」を育てる</p> <p>(2) ソーシャルスキルの向上</p> <p>(3) キャリア教育の充実</p>	<p>(1) (2)</p> <p>ア 病状や院内環境に応じて工夫した学校行事を行い、子ども自身が主体となる機会を増やす。</p> <p>イ 創作・表現活動の充実を図り、校内・地域の作品展等への参加を積極的に行う。</p> <p>ウ TV 会議システム等を活用し、外部との交流や他部署の児童生徒同士の交流を促進し、経験の幅を広げるとともに、コミュニケーション能力の向上を図る。</p> <p>(3) 進路指導部が中心となって、病弱教育におけるキャリア教育について、各部署の状況を踏まえつつ、長期的展望を持って検討に入る。</p>	<p>(1) (2)</p> <p>ア、イ 昨年と同程度の実施</p> <p>ウ 交流の回数または連携数の増加</p> <p>学校教育自己診断の行事等に関する保護者、児童生徒・病院関係者向け質問の肯定率 75%以上 (H25 保護者 72%、児童生徒 64%、病院関係者 83%)</p> <p>(3) 年度末に検討結果を校内で報告</p>	<p>(1) (2) ア、イは例年と同じく実施。ウは回数については他の授業との関係で同程度だが、他分教室や他の支援学校と連携した。行事等の肯定率は保護者が 68%と前年度を下回ったが回答数が少なく、無回答もあった。児童生徒は 78%、病院関係 82%であり、全体的には昨年と同じ状況。(○)</p> <p>(3) それぞれの部署で求められるキャリア教育が異なるがニーズに合わせた対応を継続して検討する。本校では卒業後の進路指導に加え、QOLを意識する。分教室では前籍校につながるものを提供する。今年度は医療関係者の講話を計画。</p>

府立刀根山支援学校

<p>4 専門性向上とセンター的機能の発揮</p>	<p>(1) 「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」の活用、充実</p> <p>(2) 研修体制の充実</p> <p>(3) 免許取得率の向上</p> <p>(4) 情報発信の強化</p> <p>(5) 全教員による地域支援</p>	<p>(1) 「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」の活用状況、内容の見直し等、各部署間での情報共有、検討を行う。</p> <p>(2) ア 授業力向上に伴う研修、専門的スキルのための研修、人権研修等全体での年間計画の作成、並びに各部署内での研修の共有化を図る。 イ 経験の少ない教員への校内研修を充実させる。 ウ 大阪病弱教育研究会幹事校（H27）受入れの校内準備を行う。</p> <p>(3) 特別支援教育免許認定講習の受講を積極的に勧めることで、取得率の向上を図る。</p> <p>(4) ア 各部署主催のセミナーの充実 イ HP 上での病弱教育に関するコンテンツや相談機能の充実を図る。また、実際に学ぶ子どもたちの様子をよりリアルタイムに発信していく。</p> <p>(5) ア 一人でも多くの教員が地域支援を行えるよう地域支援コーディネーターの配置や役割を見直す。 イ 広域リーディングスタッフ幹事校としての動きを、運営委員会で確認し、学校全体で取り組む。</p>	<p>(1) 部署間での報告及び他部署への助言を行う (2) 今年度の研修を踏まえ、次年度年間計画の完成</p> <p>(3) 免許講習参加者3名以上</p> <p>(4) ア 参加者アンケート肯定率90%以上 イ 更新回数、月2～3回を維持する。学校教育自己診断の保護者向けHPに関する質問への肯定率60%以上（H25 59%）</p> <p>(5) 昨年度と今年度の相違点を示す</p>	<p>(1) 現在も継続中。 (2) ア、イとも研修部を中心に継続中。 (3) 免許講習参加者3人。本校の免許保有率77%(◎) (4) ア 「筋疾患児・者のための教育サミット」33人、「病気療養児の教育研修会」60人、「滝井セミナー」246人が参加。肯定率は90%以上あり、次年度の開催も希望されている。(◎) イ HPの肯定率は61%であるが、無回答もあったことと、本校の特性から子どもたちの様子を公表できないことがあり、即時性や回数増は控えたい。(◎) (5) ア、イ 研究発表大会で発表したり、教育相談会に複数で取り組むなど前進はしている。</p>
<p>5 組織力の向上</p>	<p>(1) 学校全体で経験等を共有し、連携・協力を強める</p> <p>(2) 医療・福祉・前籍校・地域の学校等との連携強化</p>	<p>(1) ア 在籍児童生徒数の増減に即応できる柔軟な校内協力体制を確立し、業務の均等化を図る。 イ 指導書や図書等の共有化を図り、利用上の申し合わせ等を整備しスムーズな共有化を実現する。 ウ 教務関係の書式の電子化の整備・利用保存方法について、校内ルールの整備を行う。 エ 学校全体で教材、実践事例や経験等の共有を促進できる体制を検討する。</p> <p>(2) より良い連携の在り方を考えるため、各部署で行われている医療機関との定期的懇談会のあり方について再検討を行う。</p>	<p>(1) 年度末に各項目について総括し、校内で報告する 学校教育自己診断の組織の一体化等に関する教員向け質問への肯定率68%以上（H25 平均65%）</p> <p>(2) 医療機関の意見をまとめて共有する 学校教育自己診断の連携に関する病院関係者向け質問への肯定率75%以上（H25 70%）</p>	<p>(1) ア 在籍児童生徒数の増減に部署間で協力して学校全体で対応した。 イ 6部署がそれぞれ異なる教科書を使用しており費用面から指導書のすべては揃えられない。本校で一括管理して利用上の申し合わせ等を整備した。 ウ 一定整備した。さらに効率化を図る。 エ 校内研修会や研究発表会で実践事例を発表しているが、もっと積極的な発表につなげたい。 組織の一体化の肯定率は73%(○) (2) 今年度、できるだけ教頭もしくは校長が医療機関との定期的懇談会に出席した。 連携への肯定率は医療機関では63%にとどまり、無回答があったことを考慮しても、前年を下回っているため次年度はこの懇談会を機能していると捉えられるものにする必要がある。(△)</p>